パウル・ツェラン（二）

Paul Celan (2)

北　彰

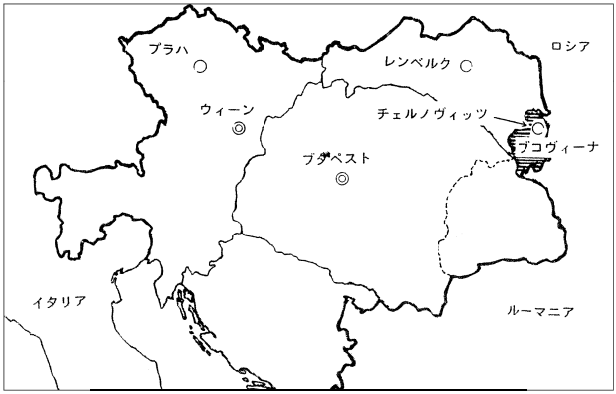
要　旨

『人文研紀要』第七四号に掲載した原稿「パウル・ツェラン――闇に沈む闇、闇に輝く闇」の続稿である。前半で、ユダヤ人であるツェランが二〇代前半までを過ごした特異な街、チェルノヴィッツを論じている。東欧辺境の街はかつてハプスブルク帝国領であった。第二次大戦中は一時ルーマニア領からソ連領となるが、その後一転してナチの侵略を受けることになる。ツェランの父母はウクライナのトランスニストリア地方に強制移送され、その地に作られた強制収容所でナチに殺された。論考後半は、ツェランの人生を決定づけた、その父母の死をテーマとした、四編の詩を選び論じている。中でも新しく発見された資料を参照しながら論じている「死のフーガ」論が、論考の中心となっている。

キーワード

チェルノヴィッツ、ユダヤ人の街、ツェランの父母、母の死、生き延びた後になお生きること、「墓の近く」、「白楊よ」、「黒い雪片」、「死のフーガ」

図１　オーストリア・ハンガリー帝国 1918年



出所：筆者作成。

Ⅰ　ツェランのチェルノヴィッツ

ツェランは、「はじめに」（『人文研紀要』七四号）で記したように、一九二〇年、現在ウクライナ共和国領となっている、ルーマニア国境近くの街チェルニウツイに生まれた。当時はルーマニア領であり、チェルナウツィと言った。しかしその同じ街は、第一次大戦までは、オーストリア・ハンガリー帝国の領土であり、チェルノヴィッツと称されていたのである。

当然のことであるが、ツェランの詩作品と実人生とは切り離すことができない。テキストとしての詩に丁寧に向かい合うことは自明なことであるが、そのテキストの背後にある彼の実人生を無視することはできないのだ。

その彼の実人生を考える時、ツェランがヨーロッパ辺境のガリチア地方にある非常に特異な街チェルノヴィッツに生まれたこと、そしてまたユダヤ人であったことは銘記すべき重い事実である。

サルトルが、その著作「ユダヤ人」で記したように「反ユダヤ主義がユダヤ人を作った」のだとするなら、一九一九年の第一次大戦終了時までのチェルノヴィッツには、ユダヤ人はほとんどいなかった、とすら言うことが許されるのかもしれない。というのもそれまでのハプスブルク領チェルノヴィッツでは、反ユダヤ主義が政治的ヘゲモニーを握ることはなかったからである。

総人口に対するユダヤ人の比率は、二〇世紀初頭において、約三分の一だったが、これは、当時のガリチアの首都レンベルク（リボフ）や（二五％未満）ウィーン（八・六％）の数値と比較してみる時、かなり高いものと言わねばならない。しかもユダヤ人は、多民族が混住するこの街にあって、他のどの民族よりも総人口に占める割合が大きかったのである。目抜き通りの主な商店はユダヤ人の経営になるものであり、中には工場所有者すら存在した。また医者や弁護士もユダヤ人が多かった。一九〇五年から一九一四年にかけて、ユダヤ人の市長が二度選ばれており、またユダヤ人の名前をつけた通りが二〇近くもあったのである。すなわちチェルノヴィッツは、ユダヤ人の街、といってもよかった。実に稀有な例と言わねばならない。

ウクライナとルーマニアの国境にある街にふさわしく、ウクライナ人とルーマニア人、それにドイツ人やユダヤ人が平和裏にその生活を営み、通りの名前は公用語であるドイツ語のほかに、ウクライナ語とルーマニア語で記されていた。

隣近所に異民族の人たちが住んでいるのはごく普通の状況だったのである。ツェランより僅かに年上の世代に属する、数少ないチェルノヴィッツ在住のユダヤ人の方に現地でお話を伺ったことがある（大多数はイスラエルに移住した）。その方のお話によれば、路上で遊ぼうとして家を出た時に、家の前で、左隣の家の人と出会った時にはルー

マニア語で挨拶を交わし、右隣の家の人と出会った時にはウクライナ語で挨拶を交わすといったようなことは、ごく普通の日常的なことであり、何ら違和感を与えるものではなかったという。

一九一九年以後、ルーマニア領となり、ルーマニアナショナリズムが強まったとはいえ――例えば通りの名前の表記はルーマニア語だけになり、公用語は無論ルーマニア語に変更されたのだが――前述したように、街を形成する中心がユダヤ人であったという状況は、第二次大戦に至るまで基本的には大きく変わらなかったようである。

図２　第２次大戦前の市庁舎広場

出所：In der Sprache der Mörder. Literaturhaus Berlin. 1993. S. 14.

【街の文学的スケッチ】

その時代の街の様子を、同じくチェルノヴィッツに生まれ育ち、戦後一九六〇年を過ぎてようやくドイツで知られ始めてきた、ツェランよりおよそ二〇歳年上の女流詩人、ローゼ・アウスレンダーは、次のように文学的に描写している。

「あの特別な風土、特別な人々。童話、そして神話が、空中に漂い、人々はそれを呼吸していた。チェルノヴィッツは、芸術の街であり、多くの芸術家たち、そして芸術や、哲学の、愛好家たちが住んでいた」[1]。

「第二次世界大戦前のチェルノヴィッツは、夢想家たちであふれ返っていた。ハシディズムを信じるものは、いずれかの聖なるラビについていた。マルクシストは、全身全霊を上げて、コミュニズムの理念に身を捧げ、残酷な警察の拷問にあっても、同志を裏切ることはなかった。シオニズムを奉じる多くの若者は、荒地を開墾するために、パレスチナに渡り、飢えやマラリアに負けることはなかった。スピノザ、カント、ショーペンハウアー、フロイト、ニーチェの弟子たちがいた。またベルリンの高名な哲学者、コンスタンチン・ブルナーを師と仰ぐ熱狂的な若者たちもいた。知識人が大きな関心を向けていたもの、それは文学であり、しかもドイツ文学だった。とりわけ、リルケとカール・クラウスの存在が大きく、人々は、あるいはリルケの模倣をし、あるいは雑誌『炬火』（クラウスが出していた雑誌）を持って、行き来していた」[2]。

ここでアウスレンダーがハシディズムを持ち出しているのはほかでもない。チェルノヴィッツの郊外には、一八四一年にウクライナから逃れてきたツァデイク（義人）、イスラエル・フリートマンが自分の居住地と定め、それ以来ハシディズムの信徒たちの巡礼の地となっていた聖地サダゴラがあったからである。レンベルクで育ったマルティン・ブーバーは、幼年時代、夏を毎年ブコヴィーナの農場で過ごしていたが、サダゴラにも出かけ、そこで「無知蒙昧な」ハシディズムの群集を知ったという[3]。聖地サダゴラの存在が、チェルノヴィッツにも影響を与えていた、ということをアウスレンダーは述べているのであろう。

図３　第二次大戦前の市内

出所：Mythos Czernowitz, Deutsches Kulturforum östliches Europa, 2008, S. 21.

また上述したアウスレンダーの言葉で、とりわけ注意を引くのが、文学、それもドイツ文学の持つ重さである。もちろん彼女自身の関心がドイツ文学にあった、ということからの発言であるにしても、チェルノヴィッツにおけるドイツ文化――あるいはオーストリア・ハプスブルク文化――が、この街でいかに大きな意味を持っていたかを思わせる証言である。事実、この街ではルーマニア領になってからもなお、町の規模からするならふさわしからぬ、とそうも言えるほどの数のドイツ語新聞や雑誌が発行されており、また街中のカフェには、ドイツやオーストリアの主要新聞が置かれていたのであ

る。

こういった街、チェルノヴィッツに、ツェランはその生を享け、ドイツ語を母語として育って行ったのである。

図４　ナチにより破壊される前の大神殿

出所：In der Sprache der Mörder. Literaturhaus Berlin. 1993. S. 42.

【街の歴史】

ユダヤ人の街とすら言える、こういった稀有な街チェルノヴィッツは、では一体どのようにして形成されてきたのであろうか？

チェルノヴィッツを州都とするブコヴィーナが、ガリチアから分離独立したのは一八四九年のことであった。ハプスブルク帝国がガリチアを領有したのは一七七二年。一方で多くの制約をユダヤ人に課しながらも、一方ではドイツ化政策をとった。学校ではドイツ語を使用し、またドイツ風の名前を名乗らせた。東ガリチアにあたるブコヴィーナ地方のほうが、税金が軽く仕事もあり、また徴兵制施行も遅かったため、多くのユダヤ人が、西から東ガリチアに移り住んだという。その結果、ブコヴィーナが、ガリチアから分離独立した一八四九年ごろには、東ガリチアに西ガリ

チアの約三倍ほどのユダヤ人が住んでいた。

このユダヤ人人口の多さが、まず何よりもチェルノヴィッツ形成と発展を支えるものであったと言えよう。

分離以後、一八六七年のユダヤ人の同権化などを経て、ユダヤ人の自由は増大し、チェルノヴィッツは、ブコヴィーナの商工業の中心地として発展していった。一八七二年には、ユダヤ教の大神殿の建築が始まり、ラビと東方正教会大主教が、仲良く礎石を置いたのである。

注意すべきは、同じガリチアの名で呼ばれていても、西ガリチア、すなわちブコヴィーナ分離独立後のガリチアが、その居住する民族や文化の点から言って、ポーランドとの結びつきが強く、オーストリア・ハプスブルク帝国に対して抵抗していたのと対照的に、東ガリチア、即ち分離後のブコヴィーナは、オーストリアハプスブルク帝国との結合が強かったことである。

例えば、オーストリアとの関係を象徴するものに大学があった。反オーストリアの傾きの強いガリチアにあって、首都レンベルクにあったレンベルク大学では、一八七一年からドイツ語による講義が廃止されたのである。ところがこういった動きとはまさに正反対の出来事が、一八七五年にチェルノヴィッツで起こった。即ち、オーストリア併合百周年を記念して、ドイツ語で講義がなされるチェルノヴィッツ大学が創設されたのである。

ハプスブルクの権力と結び合うことが、自分たちの利益を擁護することになる、そのことをブコヴィーナのユダヤ人たちは認識していた。第一次世界大戦にあたって、ユダヤ人たちは、オーストリア・ハプスブルク帝国のために戦ったのである。

【ツェランの父】

こういった街に生を享けたツェランの両親は、共にユダヤ人だった。父方の祖父は、娘婿として婚家に入り、聖書やタルムードを原語で読みながら、生涯をユダヤ教の研究に捧げた人だった。伝統的なカフタン姿ですごし、また息子であるツェランの父が結婚すると息子夫婦と同居した。ツェランも幼年時代は、同じ家の中で一緒に暮らしたのである。

父は建築技師の教育を受けたが、その教育を生かす職業にはつけず、薪などの仲買の仕事で暮らしを立てていた。生活は楽ではなかった。三部屋ほどの狭い住まいに、親戚も含めて多い時には、たった一人の子どもであるツェランを含めて、六人から八人が暮らしていたのである。しかし両親は、子どもの教育には熱心だった。多くのユダヤ人の親がそうであるように、息子にはこの世でいくらかでも楽に暮らしていくことができるように、実際的で有用な技術を身につけ、また社会的にも高い地位についてもらいたいと願ってい

図５　ツェラン生家

出所：1991年 筆者撮影。

た。当時子どもに教育を授ける余裕があったユダヤ人家庭に共通することであったが、ツェランの父もまた息子に医者になってほしいと考えていたのである。事実ツェランは後に、医者になる教育を受けるために、ギムナジウム卒業後、フランスのトゥールにある医学進学準備学校に入学することになる。

父は正統派のユダヤ教徒であり、政治的にはシオニストだった。仕事の多忙さのゆえに、家族そろって毎週礼拝に出かけることは習慣となっていなかったが、金曜日には自宅に安息日のろうそくを灯していたようである。また食事にあたっては、どういった食物なら食べてよいか定めた食事規程のコシェルを、おおむね守っていたらしい。一三歳で息子に男子の成人式にあたるバル・ミツヴァを受けさせた。そのためもあって、七歳から一三歳まで息子にヘブライ語の家庭教師をつけている。

家庭で話されていたのはドイツ語、それも母親が意識的に使うように仕向けていた、標準的な美しいドイツ語だった。つまり、東欧ユダヤ人庶民層の言葉であるイディッシュ語や、土地の訛りのあるドイツ語でもない、一種人工的なドイツ語であったことになる。

幼稚園は、街で唯一ドイツ語で教育するユダヤ人子弟のみが通う私立マイスラー幼稚園に入った。すでにチェルノヴィッツがルーマニア領となっていた時代であるから、無論公用語はルーマニア語である。小学校は最初私立マイスラー小学校に入学したが、学費の負担に耐え切れず、やがてシオニズム組織の運営する小学校に転校した。ここではしかし授業はヘブライ語で行われていたのである。つまり幼い子供であるにもかかわらず、すでにドイツ語、ルーマニア語、ヘブライ語を同時に学ばなければならなかったことになる。これは日本のような国にあってはとても考えられない状況である。また幼い子どもにとって（いや成人した大人にでさえ）かなりの負担であると言えよう。